

さくらじま

129号

発行：
公益社団法人 鹿児島県社会福祉士会
会長 久留須 直也
鹿児島市鴨池新町1-7 県社会福祉センター内
Tel 099 (213) 4055
Fax 099 (213) 4051

URL:<http://www.minc.ne.jp/~jacsw> E-mail:jacsw@po.minc.ne.jp

相模原事件について考える

社会福祉法人吾子の里 相談支援センターあこ
浅田 茂毅

平成28年7月26日、障害者差別解消法が施行されたこの年に、相模原市において最悪の事件が起きました。亡くなられた方々、ご遺族の皆様方には衷心よりお悔やみ申し上げますとともに、怪我をされた皆様方、関係者の方々の1日でも早い、身体と心のご回復こそよりお祈り申し上げます。

私はこの事件、施設で働いていた人間が犯人だと言うことに激しい怒りを覚えました。利用者を守るはずの支援者がなぜ凶行に及んだのか？約2年近く寄り添い暮らした利用者の方々に何故必要のない人と考えたのか？最初は評判の良かった職員が、なぜこんな風になっちゃったのか？もちろん、本人の気質によるものも大きいと思います。しかし、共に働く同僚、施設の風土・文化はどうだったのでしょうか。私はとても気になります。

私たちは、利用者の方々が地域のなかで伸びやかに暮らせるように、日々それぞれの良さや楽しさ、幸福を地域の方に伝える努力をしています。しかし、共に働くスタッフ同士の意識は、ちゃんと向かい合っているのでしょうか？

厚労省の中間報告では、精神障害者の退所後のケアのあり方を中心にまとめられていましたが、私は疑問を覚えずにはいられませんでした。福祉とは、「人々の幸福」という意味です。私たちスタッフは「支援のあり方」について深く話し合うことは良くありますが、利用者の方、同僚の「どこが人間として好きか」「どんなところが素晴らしいか」などを話し合うことが出来ていないことに気付きました。職場には色々な経験を積んで入職される方々がたくさんいます。また、すべての利用者の方々はその生きてきた年数分の生活史や家族の想い・夢・希望を持たれています。そのことをお互いどれだけ理解できているのでしょうか。人と人が相互に支え合い心を通わせている福祉事業所だからこそ、本当はそのことを一番大切に、それぞれの人生を豊かにしていく礎としなければならないと痛切に感じました。

今回の痛ましい事件は他人事ではありません。相模原市は遠くにあるのではなく、みんなの心の中にもあるのではないのでしょうか。私たちの地元・地域で偏見や誤解があるとすれば、まず、自分の価値観・行動を見直すことから始めなければならないと思います。

多くの方々がショックを受けています。1日も早く皆様に笑顔が戻る日をお祈りいたします。そして今後も利用者の皆さんのことをもっと思いやり、幸せに暮らしていける社会作りを目指して、みんなと一緒に頑張りましょう。

平成28年度第1回鹿児島県社会福祉士会 北薩地区支部研修会を受講して

社会福祉法人 出水福祉会
障害者支援センターいずみ園
大原 達矢

今回の研修を受けて相反する2つの言葉を感じた。

「大胆さ」と「繊細さ」。

社会福祉士の活動において、これをバランスよく発揮し、環境をコーディネートしていくことの大切さを感じることができた。

はじめに熊本地震の影響を、北薩地区に住む私の実体験を通して紹介したい。

平成28年4月14日21:30頃。携帯電話から通常聞かれない、けたたましいブザー音に驚いた。災害の警報であることを認識し、今から起こる事象への不安と、2階で寝ている家族を心配する気持ちとが入り交じり、恐怖を覚えた。揺れが来る。最近感じなかった大きな揺れであった。テレビをつけ災害の情報を収集しながら、家族の無事を確認しているが、自分を落ち着けることにも必死であった。震源地は熊本。当時は南海トラフ地震の発生確率や、備えを促すニュースが頻繁に騒がれていたため、隣の県が震源地になることを予想していなかった。その日、その後も携帯電話の警戒ブザーや揺れを何度も感じていた。

数日後、熊本はこの地震の本震となる震度7の地震を観測している。短期間で大きな揺れを何度も確認し、震度7の地震においては2回も起きていることになる。

震源地の隣県である鹿児島、特に北薩地区はあわただしくなった。近くのスーパーやコンビニ等の店舗から、水やパンなどの食料が消えた。今日の情報化社会の情報伝達力は正確さ、不正確さを問わず早く、震源となった断層が北薩地区にも伸びており、近い将来同じ規模もしくはそれ以上の地震があるとの情報が流れていた。みんな不安を感じており考えることは同じである。「自分たちの地域にも震災は起こる!!」。

被災地への配達、被災地からの避難とともに、不安や自分の大切なものを守りたいとする地域の備蓄などで、地域の大型店をはじめ、小さな商店などでも水は手にはいらなくなった。

隣の県の地震の影響が身近に感じられ、混乱している状況が伝わってきていた。

このような体験をもとに、改めて災害対策について考察し、実践することをまとめておけるよう研修会に参加することにした。

研修会では、現地で災害ボランティアセンターをいち早く立ち上げられた秋山真輝氏の現地での実体験をもとに、数多くの写真や動画が紹介され、テレビ等の報道では知りえない震災の細部が知ることができた。被災地がどういうことになっているのか、また震災の恐ろしさ、その後の復興の難しさを知った。

研修会の中で秋山氏から、災害ボランティアセンターの立ち上げについての話を聞くことができた。

災害ボランティアセンターの立ち上げは、ゼロからの出発であることを学んだ。支援の拠点となるセンターの効果的な立地を考え、場所を確保する。また場所を確保してもセンター内のどこに、何を、どのように配置し、物の流れ、人の流れを安全かつ効率的に発揮できる環境を計算し整える。そして現地のニーズを集約し、必要なところに必要な支援を提供する。まさにコーディネート力であ

る。資源を発掘し、それらを結びつけ、新しい資源を創造する。ニーズに応じたサービスを必要に応じて提供する。基本的なサービス提供までの流れと技術、地域、関係機関との協働における関係性の強さを感じた。

また、被災者の中には「自分が支援を受けてもいいのか」という思いがあるということも話をされていた。被災者が被災したニーズにあった援助を受け入れることができるようにすることも重要な役割である。

研修を振り返り、もし大規模災害が起こった際に、自分が何をすべきなのか、何ができるのかを考えさせられた。

被災者支援にあたる者も被災者であることが多いようである。その支援者も、生活の基盤である家庭での立場がある。家庭では夫や妻であり、父や母である。人によっては長男、長女であったり、地域の長をしていたり、家庭及び地域での重要な役割を果たさなければならない。一方、福祉人としての立場もある。日頃から付き合っている利用者の顔が浮かび、あの方にはこういう支援が必要ではないかということが想像できてしまう。仕事上の関係と割り切れない思い、責任感が表出し、いてもたってもいられなくなる。支援者も色々な立場があり、ジレンマが各個人を苦しめることになる。日頃から備えることができないことへどう立ち向かうのか。有事の際を想定し、地域とのより綿密なシステム作りを考えておく必要がある。

また、施設として何ができるかも考えておかなければならないことも感じた。

福祉施設はその特徴上、地域の支援の拠点として多くのことが求められる。福祉避難所に登録しているか否かは関係なく、助けを求める被災者がドッと押し寄せてくることが予測される。従来の利用者の支援に加えて被災者の支援もしなければならない。本当に避難所として運営し、冷静に行動できるのか。ここでも葛藤、ジレンマが襲う。

この研修から多くのことを学び、そして日頃からの災害訓練の大切さ、心構えの不備を改めて考えさせられた。また福祉活動の基本的な技術、アウトリーチをかけ、現場のアセスメントを行い、ニーズを整理する。ニーズに合わせた環境を調整し、ない場合は資源を創造し、調達する。それらをコーディネートし、必要なところに効果的にサービスを提供する。またこれを迅速に行わなければならない。今までの経験と他者との連携を細かくかつ大胆に発揮し、ニーズの充足に向けて迅速に行動していく。

このことからいかなる場合においても、初期動作の「大胆さ」と、綿密な計算によるコーディネートの「繊細さ」、支援提供までのプロセスを強く感じた研修会であった。



南薩ユース研修 星塚敬愛園見学及び入所者の方の講話を聞いて

間藤 智美

7月9日土曜日に南薩ユースの研修において、鹿屋の国立療養所星塚敬愛園の見学と入所者の方のお話を伺うことができました。とても貴重な経験をさせていただきました。

星塚敬愛園到着後、まず、職員の方から星塚敬愛園の説明と、展示物についての説明をしていただきました。

ハンセン病の方が、なぜ、強制的に隔離されなければならなくなったのかの経緯を伺いました。ハンセン病は、本来であれば、感染力の弱い病気であるけれども、昔は恐ろしい伝染病と考えられており、放浪や自宅療養をする感染した方が収容されていくことで、差別や偏見が生まれ、昭和6年、らい予防法により療養所ができ、人々の間にハンセン病は恐ろしい病気だというふうイメージを植え付けられ、偏見や差別が広がっていったとのことでした。そして、展示物に関しては、プライバシーのない居住環境を再現されたものや、看護職員の不足により、適切な治療を受けられずに、手足が変形してしまい、さまざまな道具がなければ生活できないこと、園だけで使用するお金があったことなど、知らなかったことをたくさん知ることができ、勉強になったと同時に、なんでこんな状況になってしまったのだろうかと悲しくもなりました。そんな中を懸命に生きてこられた方が、現在も星塚敬愛園だけでなく全国にまだまだいらっしゃることも教えていただきました。隔離された状況の中でも、映画を観たり、ゲートボールなどをされたりと様々な活動も盛んだったということを知り、苦しい中でも楽しみを持って生きていくことが大切なんだと思い知らされました。

見学が終わると、入所者の1名の方から、約1時間の講話を聞かせていただきました。星塚敬愛園に収容された経緯、来てからのこと、そして現在、あちこちに行かれ講演をされているということなど、貴重なお話を聞かせていただくことができました。一緒に研修に参加した方のすすり泣きが聞こえ、私も、話を伺っている時に涙が出てきました。しかし、入所者の方の話をされる前後の笑顔がとても素敵で印象的でした。また機会があればお話を伺いたいと思いました。

講話後は、再び職員の方から案内をしていただき、宗教会館や子どもの慰霊碑、納骨堂を見学させていただきました。高齢化が進み、施設で亡くなる方がほとんどということをお聞きしました。らい予防法の廃止に対して、訴訟を起こされ、勝訴し、現在に至りますが、時代も法律も変化したけれども、昔の偏見・差別から生まれた根がどれだけ深いものなのか、いろいろと考えさせられました。

鹿児島に、療養所があることやハンセン病に対して差別があったことなどは知っていましたが、実際に足を運ばないと分からないことがたくさんありました。今回、縁あってこのような機会に参加させていただき、とても有難かったと思います。



愛媛松山旅行記

南薩支部 福崎 貴洋

7月2日～3日に愛媛県松山市において開催された「第24回日本社会福祉士会全国大会・社会福祉学会愛媛大会」に参加してきました。そして今回の大会テーマは「生きる」を支える～社会福祉士の可能性～という事で2日間貴重な経験をする事ができました。

さて、大会は2日間という日程でしたが移動の観点から前後1日ずつを主に移動に当てる形で3泊4日という長旅になりました。なので結論から言うと「慣れない事はするものじゃない」という事になります。今回は大会内容についてもですが、こんな私の旅行記として読んで頂ければと思います。

1日目、早朝5時過ぎに自宅を出発し一路鹿児島中央駅へ行き新幹線を乗り継ぎ広島福山から高速バスで瀬戸内しまなみ海道を渡って四国に入りました。四国はバスの終点が今治市で、そこからJRで松山市へ向かいました。文章にするとたったの3行ですが松山市に着いたのは15時頃…すっかり疲れたので予約していた宿に行こうと地図で松山市内をざっと確認すると宿の位置と大会会場の場所が全くの逆方向と言ってよい程遠い事が判明したことに驚きつつ宿に向かい1日目を終了しました。

2日目、大会は12時半からという事で午前中は松山市内を散策してから会場の「ひめぎんホール」へ行きました。会場にて受付を済ませた後すぐに須藤事務局長に遭遇、「アレがあるよ」と案内された先には噂に聞く「蛇口からPOMジュース」のコーナーがありました。蛇口からPOMジュースが出るという不思議な体験をしつつ会場内を少し見て回った所で大会が始まりました。

大会初日、シンポジウムの中でシンポジストの運営するNPOで支援しているある障がいのある家族の事例は、高齢者分野にいる私にとって現在進行形で結婚子どもを産み育てていくという「生きていく」為の支援を老いて亡くなるまで継続すると言うのは新鮮な気持ちで聴く事ができました。他の報告者の内容もそれぞれに考えさせられるものであり、福祉の世界に踏み入れた者として、その深さ広さを再認識させられるものでした。

大会初日終了後お待ちかねの懇親会、会場はかの有名な「道後温泉」の一角にあるホテルなのですが、鹿児島出身者の私のイメージでは「温泉地＝郊外」でしたので移動に悩んでいた所、会場まで徒歩で10分程度との事で須藤事務局長と徒歩で向かい、途中で久留須会長と合流し会場入りしました。懇親会では歓迎セレモニーや挨拶が続く中乾杯の瞬間を待ちわびていたところサプライズゲストが登場。愛媛県選出の塩崎厚生労働大臣が挨拶に登壇、色々と話をする中で驚いたのが社会福祉士を持っているとの事、その他選挙期間中という事もあり政権の福祉分野での実績などを話して帰って行きました。そしてようやくの乾杯、愛媛の郷土料理に舌鼓を打ちつつ他県からの参加者の方々と話をしたりして楽しい時間を過ごせました。

大会2日目、メインはNPO法人自殺対策支援センターライフリンク代表清水康之氏による記念講演。講演前に会場内に設置されていた過去に自殺した人たちの事例のパネルを見た感想としては良くも悪くも皆さん真面目で優しい日本人なのだなど、それであるが故にひとつの決断に到ったのだなど思いました。講演では様々なデータや要因分析を元に話があり、現在自殺者の数は減少傾向で年間3万人を切っているが、「死」にはその先が無く実質的には減少はしていない。自殺対策の理念として、「自殺対策とは『当事者本位の生きる支援』」、「『もう生きられない』『死ぬしかない』という状況に陥っている人が、それでも『生きる道』を選べるように支援すること。」、「そもそも、人がそうした状況に陥ることのない社会を創ること。」、「自殺対策とは、地域・社会づくりでもある。」との4点を挙げて、実際に自治体と共に実施している対策事業による地域・社会づくりは今後全国的に波及して、「自殺」という選択肢を限りなくなくし、「生きる」という生命として根源的な権利を行使できる社会が実現するよとの想いの中で私の愛媛県大会を終えました。

大会後、松山城などを少し観光してから鹿児島県からの参加者で集まり居酒屋にて会食をしました。さすがは愛媛と言いましょか、メニューのそこかしこに踊る「みかん」の文字…、「みかんづくし」のオーダーはしませんでした。郷土料理を食べながら熱い話をしてこちらも大変勉強になりました。

こうして全日程を終了し翌日帰途に着きました。来年は5年前の震災で大きな被害を受けた福島県での開催だそうです。会場も当時県内で最大クラスの避難所となった所で行うとの事。関東圏と遠いですが色々と考えさせられる経験ができるのではないかと思います。

平成28年度ホームレスサポート委員会 第一回研修会・事例検討会開催

ホームレスサポート委員会
濱田 和幸

平成28年6月19日(日)午後1時より県社会福祉センターにてホームレスサポート委員会の第一回研修会・事例検討会が開催されました。当日は午前中に一部地域で土砂災害警戒情報が流れるなど、悪天候に見まわれましたが、登録されている委員の約3分の2に当たる23名の委員の出席がありました。

研修では委員長の中村さんの司会・進行で委員の自己紹介に始まり、ホームレスサポート委員会設立以前からの路上生活者との関わりや設立の経緯、鹿児島市との委託契約・仕様書の確認、説明等が行われました。委託契約では巡回人数が1グループにつき2名以上と決められている点や「目視のみ」だけでなく「面談」を行い日常生活の相談に応じる事が求められている事などを確認・共通理解できました。

また、研修会の後半では平成27年度の実績や地区割り・シフト表の確認、記録シートの記入方法やメーリングでの報告方法など各委員が今後活動を行っていく上で必要な知識や考え方の講義もありました。会の最後では各グループに別れて事例検討も行われ活発な意見交換も見られました。事例検討では「定期的な巡回で毎回お会いしていた路上生活者が、支援開始後に就寝場所を変え居場所が分からなくなってしまった」という事例で巡回相談時の関わり方や、路上生活者の発言の中から考える「真意」について検討が行われました。

路上生活者の気持ちを考えて行動できていたのか、本人の発言に対してどのような姿勢が最善の対応だったのかを考える良い機会となりました。また、支援の必要性についても、本人は「今」してほしいと考えているのか、後々でもいいのか、若しくは自分自身で解決したいと考えているのか、その捉え方や支援の方法・進め方も支援する側の経験や知識、協力体制の有無によって結果も変わってくるという結論に達しました。

私自身は、巡回相談時の面談経験や新規の路上生活者との面談回数もあまり多くありません。そ

のため、どこか自信が持てない部分があります。もし、支援の仕方で困ったときには経験豊富な先輩方のご意見を参考に、試行錯誤を繰り返しながら路上生活者本人にとっての最善策を見つけていければと考えております。これからも社会福祉士の活動を通して、皆様と多くのことを学び、成長していければと思っております。

最後に、お忙しい中、研修の準備から講師までしていただきました中村委員長、ありがとうございました。また、ご出席頂いた皆様もありがとうございました。今後ともよろしくお願い致します。

委員長就任のご挨拶

総務企画委員会
委員長 松本 雄一郎

今年度から総務企画委員会委員長を拝命しました。これまでの歴代の委員長の下で委員として動いてまいりましたが、果たして自分が委員長として委員会を運営できるのか心配しております。ただ、総務企画委員会には優秀な委員の皆さんがおりますので、助けていただきながら鹿児島県社会福祉士会を盛り上げていきたいと思っております。

われわれ総務企画委員会は、県民の福祉向上に寄与する組織体の実現のため、事務局と連携を図りながら、裏方の仕事を行うとともに、組織強化のため、入会促進と会員交流を目的とした活動を行うという活動目標を掲げており、入会促進・会員交流・組織サポートといった3つの具体的な内容で活動しています。

鹿児島県社会福祉士会がますます盛り上がっていくよう、総務企画委員一同で頑張っていきたいと思いますので、会員の皆様のご協力のほどよろしくお願い致します。

